
雨時々晴れ

亜矢那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨時々晴れ

【Nコード】

N6930I

【作者名】

亜矢那

【あらすじ】

中学2年生の誕生日だったその日…

最高の日になるはずだったその日に実花は大好きだった彼に

別れをきりだされてしまう… それ以来実花は恋ができなくなる。

それから3年後。。。実花は新たな恋をする。 そんな実花を中心

に描く

恋愛物語…

プロローグ

雨が降っている。

私の心に雨が降っている。

天気は晴れなのに。。。

1 私の誕生日だったのに 雨

9月26日。私の誕生日。

今までで最高の日になるはずだった。
だって・・・

大好きな人と過ごすことになっていたから。

心の天気予報は晴れだった。
なのに・・・

私は一宮実花。中学2年。

私には彼氏がいた。

田原悠。クラスメートで、やさしくて素敵で…。

大好きだった。

私は今日、悠と過ごすことになっていた。
二人っきりで…

「実花っ」

まちあわせしていたビルの前に悠がきた。

午前10時。時間ぴったりだ。

悠は時間に正確なひとだった。

「実花っ早いな。待ったか？」

「ううん。全然大丈夫。うちもいま来たところ。」

「そっか。よかった。じゃあ行こうか。」

「うん」

今日は二人で水族館に行くことになっていた。
二人っきりのデート：

それは私にとって幸せな：幸福な時間だった。

時間はあっという間に過ぎ、夜になった。

帰り道、悠と二人で電車に乗っていた。

「実花。寄り道してもいいか？」

「いいよっどこいくの？」

「秘密な。」

こういうところも好きだった。

ついたのは海岸だった。

「実花。誕生日おめでとうっ」

「ありがとう。」

「これプレゼントな。」

開けてみるとそれはハートのネックレスだった。

「かわいいっ」

「気に入ってくれて良かったよ。」

「悠…これからも一緒だよね？」

「……………」

沈黙……

「悠？」

不安な気持ちになり聞いてみる

「実花……ごめんな。俺、もう実花と一緒にいられない。」

「え……」

信じられない答え。

「好きな人が出来たんだ」

「ウソ。。。ウソでしょ？冗談やめてよ」
受け入れられない…

「本当だよ。ごめんな。」

「じゃあどうして今日こんなに優しくしてくれて…プレゼントもくれて…」

「思い出作り。それだけだよ。いままでありがとうな。もう何も言わないでくれ。」

「…ゆう」

名前を呼ぼうとしたら口をふさがれた。

最後に少し微笑みを見せて・・・

悠はいつてしまった。

どうして？

ずっと一緒って言ってたじゃん

今日こんなに楽しかったのに。。。

プレゼントだって…くれたじゃん

なのにどうして？

なんで？

好きな人って誰なの？

私の心の天気は一転して雨が降ってきた。

「うわああああん・・・」

涙があふれてくる。

予想していなかった展開。

誕生日。。。こんな最高の日なのに

私はなぜ泣いているのだろう。

どうして…

どうやって家に帰ったのか分からない。

お母さんはまだ仕事。

お父さんも仕事。

1人だった。

悠はもういない…

一人。。。

「悠っ悠~~~~~」

聞こえるはずのない場所にいる悠にむかって
私は一生懸命叫んでいた…

天気は晴れなのに心の天気は…

雨だった。

1 私の誕生日だったのに 雨（後書き）

恋愛系の小説スタートしました♪
よければどうぞ^^

2 やまない雨

次の日私は学校を休んだ。
いけるわけがない。

だって：

悠がいるから。
ふられた。。。そんな思いでいっぱいだった。

気分転換に出かけることにし、近所のゲーセンへ行った。
いま思えばいかなければよかったと思う。
そこで見たものは。。。。

悠だったのだ。

私はとっさに隠れた。
隠れて正解だった。
一緒にいたのは。。。

望。。。だった。

望は私の親友で悠との恋を応援してくれた人だった。
私は裏切られたのだ。

しかも二人は学校をさぼってデートをしている。
悠は笑っている。
望も笑っている。

私は二人の前に突然現れて引き裂いてやりたかった。
憎かった。

どうして？

悠。。

気分転換のためのお出かけが私の心の雨をひどくさせ嵐が吹き荒れていた。

「あれ？実花じゃん？」

ギクツとする。

見つかった。。。。

「実花。。。」

悠が見てくる。

「実花くく私の彼氏っ　悠だよっってもう知ってるよね☆」

「うん…」

無神経な望に腹が立つ。
むかつく…

「悠いこ」

望が甘えた声でいう

「そうだね。行こうか望。」

そういつて悠は私を見ないようにしながら行ってしまった。

もう悠とは仲良くできないんだ。

別れた。それだけでもう悠とは笑いあえないんだ。

そしてもう。。。望とも一緒にいられない。

恋はもうしない…

そう心に誓った。

3 決意

それからほどんなに告白されようと…
かっこいい人がいようと…

恋はしなかった。

もうこりごりだった。

怖かったのだ。

でもその決意が揺らぐ日が来てしまうのだ…

4 3年後に…

3年後、私は高1になった。

悠や望とは違う高校へ進学した。

2人は同じ高校に行ったらしい。

中2の時、あんなことがあったけれどいまは元気にやっている。

新しい友達だっている。

不自由なことなんて・・・

ある。

そりゃあ彼氏はほしい。

みんな彼氏がいる。

でも裏切られるのが怖い。

そんな恐怖のせいで私は人を信じられず恋もできなくなっていたのだ。

クラスは1ー4だった。

私立を受験したし友達もいないから今日からまた新たなスタートになる。

私は中学の思い出を捨て、教室へ入った。

席は名簿順。

となりにも当然男子が座っていた。

かなりイケメンというかなんというか…

でも私は何も感じない。

人を思う気持ちが私にはなくなっていたからだ。

担任が入ってきた。

女だった。

「おはようございます^^」

「おはようございます」

ぼそぼそとみんなが挨拶する

「このクラスの担任の児玉 広海です。

さっそく出席を取ろうと思います。

えーっと・・・井川 雄君」

「はい」

隣の奴も私と同じいちばんだ。

1－4には「あ」から始まる人がいなかった。

雄...??!!

ふっつと田原悠のことを思い出した。

ぼーっとそんなことを考えていたら名前が呼ばれた。

「一宮実花さん」

「・・・はい」

返事が間に合わないところだった...

今日は最初の日だったのですぐ帰れた。

帰りは一人か。。。なんて思っていたらクラス的女子から声をかけられた。

「一宮さん？」

ふりむく

「家ってどっち方向？」
突然聞かれた。

「駅のほう…かな。」

「あゝ一緒だっ よければ一緒に帰ってもいいかな？」

「えっ いいけど…」

私はその子と一緒にかえることになった。

「突然ごめんね。私は岡崎 希 よろしくね。」
名前を聞いてびっくりした。

のぞみ……
悠とのぞみ……偶然なのだろうか？

「希ってどんな字？」

「えっ？希望の希だよ」
ほっとする。漢字まで同じだったら…

「そっかぁ…… あっ私は一宮実花。こちらこそよろしく^^」

「よろしく^^」

「でもどうしてうちなんか誘ってくれたの？」
聞いてみる

「うちも一人だったから。。。帰る人探してたんだ♪
一宮Sがこっちほうこうでよかった」

「そっか。あつ一宮Sじゃなくていいよ。実花でいいから。」

「わかった。うちも希でいいからね。」

「うん」

望…のことを考えてしまいそうで怖かった。
でもいまここにいるのは希だ。望とは関係ない…

「あつうちここで曲がらなきゃ…」
希が言った。

「そっかあ・・・じゃあした」

「うん 明日ね」

そういつて私たちは別れた。

希と雄・・・名前が同じなのは偶然なのだろうか。
私は恋をしてしまうのだろうか…

いや。

そんなことは絶対でない。
もう恋はしないって決めた。

これはただの偶然だ。

そう思ったかった。このときは・・・

でも私はそのあとに偶然なんかじゃなかったことに気付いてしまう・
・

7 3年前の恐怖

「おはよう」

希が来た。

どさっ

無言で雄が入ってきた。

希と雄：

「実花？」

「あっおはよう♪」

「おはよう大丈夫？ぼーっとして……」

「ごめん。大丈夫だよ。」

「そっか。そうだ…ちょっといいかな？」

「えっ うん…」

私と希は屋上へ行った。

「実花…あのね。あたし雄に好きなの。」

「えっ？」

「雄とは中学が一緒で。あいつ無愛想だけど優しいの。でもずっと片思いなんだ〜…」

「そうなんだ〜。」

恋・・・か。

「実花にはしっておいてほしくて。応援…してくれる？」

「うん^^がんばって。」

でもこの選択ははたして良い選択だったのだろうか…

8 また恋…

また恋…か。

もう巻き込まれたくないし。

希応援してあげよう。

そう思ってた。

しばらくは…

雄は悠と性格が違う。

まったくちがう。

でも優しい。ということにすぐ気付いた。

隣にいればわかる。

でも恋はしない。というかできなかった。

恐怖。。。裏切り。。。。

昔の思い出が脳を通りすぎていく。

怖い…

それに希。私の友達。

ずっと片思いしてるんだから応援してあげなくちゃって思う。
そんな風にすごしていたあるひ、希に言われた。

「うち・・・そろそろアタックしようと思う。」

「それって？」

「告白考えてる。」

・・・

「そっかぁ。相談乗るよっ♪」
軽くそう言ってしまったが…

「ありがとーよろしくねっ^^」
希に抱き締められた。

望…

思い出してしまう。

「あっ・・・用事あるんだった…ごめんね。さきかえる。」
そう言って逃げた。

これ以上この場にいられない。

なぜだ？

なぜだろう。

どうして心がもやもやするんだろ…

雄のことなんて別に。。。

いまならすぐ気付いていただろう。

この時の私が雄のことを好きだったということに…

この時の私は心が凍っていた。

恋愛というのをしばらくしていなかったからだ。

私…どうしてこんな気持ちなの？
そう思った。

9 要って…

「おい。実花？」

希がよんでる。

「えっ・・・あ・・・ごめん。何？」

「もう・・・聞いてなかったの？私雄に告る。今日。」

「今日？」

「うん。放課後。実花に手伝ってほしい。」

「なにをすればいいの？」
不安になる。

「実花が雄をよんでほしくて。」
えっ？

「なんていえばいいの？」

「うーんと、先生がよんでるから家庭科室きてって。」

「うん。わかった・・・」

「よろしくねっっ!!」

「うん。」

「そんじゃっ!!」

そういつて希は上機嫌でいつてしまった。
心がなんだか重い。もやもやする…

その日の放課後わたしは雄を呼んだ。

雄は家庭科室へいつてしまった。

内心振られればいいのと思う私。なぜだろう…

その日の夜メールが来た。

「実花く!! 付き合うことになったよ」

私は良かったねとだけ返事をし寝た。

なんだか悲しい…

次の日雄の隣に座るのが嫌になった。

しかも希にこう言われた。

「雄はうちの彼氏だからあんまりはなさないでね」
独占欲強いな…そう思った。

放課後私は一人で帰った。希は雄と帰るから…

ほぼ無の状態で歩いていたその時誰かが私を呼んだ。

「ねえ・・・実花?」

振り向くと…

望がいた。

「のっ望?」

怖い：自分を裏切った望が怖い：

「実花：うちね。悠と別れたんだ。えっ？」

「悠は実花が好きなんだってさ。は？」

「だから実花悠のそこ行ってあげなよ」
「なんで？どうして？」

「悠は実花じゃないとだめなんだって。」

怒りがわいてきた

「なんで？なんで私なの？悠は望を選んだ。私は捨てられた。なのに戻って？自分勝手なのもいい加減にしてほしい。わたしがどれだけ悲しかったか知らないくせに！」

「実花：」

「それに望だったって私を裏切った。それなのにどうしてこんな普通に話しかけてくるの？
ありえないんだけど。」

そういつて私は逃げた。走って走って：
だいぶ走ってから私は走るのをやめた。
そのとき・・・

「わお・・・お前ってあんな風に怒鳴るんだな。あんな過去あったんだ。」

へ？聞かれてる…

振り向いたら。。。。

クラスメートの菊池要がいた。正直言うと知らない。。。

「俺は菊池要。クラス一緒。おまえ一宮だろ？」

「そうだけど。。。。」

「さっきの全部聞いてた。」

「うそ・・・最悪じゃん。。。。」

「俺でよければ一緒にいるぜ？」

「はあ?????」

「な～んてね。まあ覚えておいてよ。よろしく♪」

そして菊池は私の唇に軽くキスをしてその場を去った。

えっ・・・いまの何？私はいまおこったことが理解できなかった。
キス？

柔らかい唇だったな…

なんてかんがえてる私がいる・・・

菊池要…か…。覚えとこうかな。
そう思った。

9 要って…(後書き)

菊池要は結構重要人物です♪
この先をお楽しみに☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6930i/>

雨時々晴れ

2010年10月28日08時21分発行